

資料紹介

イラン・イスラーム体制とは何か

吉村慎太郎『イラン・イスラーム体制とは何か 革命・戦争・改革の歴史から』
書肆心水 2005年 380ページ。

本書は、1979年のイラン革命から、ハータミー政権までをたどるイラン政治史である。イランの国内政治の諸相を、国際関係をもからめた形で描き出している。著者は、「テロリズム」や「イスラーム原理主義」にまつわる言説がしばしば歴史的経緯を無視した形で一人歩きする現状を憂い、マスメディアなどでは常に断片的にしか取り上げられない「イランの宗教勢力」「対米関係」「改革派」などのトピックを、事実経過を丹念に追う手法で解説している。本書の構成は以下のとおりである。

- 序章 イラン革命と歴史の変転
- 第Ⅰ部 1979年イラン革命と国際関係
 - 第1章 パフラヴィー独裁と国際関係の変転
 - 第2章 革命の「イスラーム」化の背景と「ヴェレーヤテ・ファギー」体制
 - 第3章 冷戦下のパフラヴィー独裁と米国「米国に死を」の背景
- 第Ⅱ部 戦争下のイラン イスラーム革命政権の変転
 - 第4章 イラン・イラク戦争発生の背景
 - 第5章 イラン・イラク戦争の展開と停戦受諾への道
- 第Ⅲ部 カリスマ的指導者不在のイスラーム共

- 和体制の苦悩
- 第6章 戦後イランの混迷とホメイニー体制の終焉
- 第7章 ポスト・ホメイニー政権の成立と党派政治
- 終章 ハータミー政府の登場とイラン政治の展開

ちなみに巻頭には「主要人物紹介」があり、イラン現代史上において著名な法学者、思想家、政治家などのプロフィールが掲載されている。

第Ⅰ部では革命へ至る経緯、第Ⅱ部では革命直後から始まったイラン・イラク戦争が取り上げられ、いわば革命の象徴的な存在であったホメイニー師の存命期におけるイランの政治展開が描かれる。これに対して第Ⅲ部では、ホメイニー師死後のイランに焦点が当てられている。1990年代以降、国内では政治的・社会的に大きな変化・変容が刻々と進んでいるにもかかわらず、一般には相変わらず革命当初のイメージで語られがちなイランだが、四半世紀を過ぎたいま、そこでは何が変わり、何が残ったのかを把握するための有益な情報を、本書は提供してくれるだろう。

(岩崎 葉子)